我の文化程度の相異と、受容れ側の國民性とによつてちがつてくると思われます。一般的に言いますと、彼我の間に格段の相異のある時には、文句なしに全面的に受容れる場合が多いのでありますが、しかも國民性の強いものや、獨創性の勝れた民族にあつては、そのままには受容れないで、取るべきものだけを取容れて固有の文化の發達に資するのが常であります。それでは、飛鳥奈良時代の文化の受容れ方はどんな有様であつたでしようか。その詳細については、今後續いて講演される筈のそれぞれの部門の方にゆずり、私はほんの總括的前座的に私見をのべるに止めておきたいと思います。

飛鳥・奈良兩時代の文化現象をひつくるめて言つてみますと、飛鳥時代の文化の骨組になるものは、㈠佛教の興隆と、それに伴う美術工藝を始めとする一般文化の發達―佛教を中心とする文化の發達―と、㈡もう一つは、律令すなわち法律政令を制定して、中央集權の國家をつくつて行く、この二つが飛鳥時代の文化の骨子であると考えられます。それから、奈良時代の文化については、飛鳥時代の文化進展の勢を受けついでさらにその勢を進め、日本文化としての或る程度の成果を得た時代と見ることが出來ると思います。次に少しく詳かにその次第を説明して見ましよう。

私は、飛鳥時代においては、佛教が一つの文化の中心になつたと申しましたが、その佛教は、改めて申し上げるまでもなく、既に飛鳥時代以前に入つておりまして、記錄によりますと、繼體天皇の朝には、司馬達等が佛教を將來し、ついで欽明天皇の時代には百濟から佛像や經論を傳え、それを容れるか容れないかについて、有名な蘇我・物部兩家の大軋轢がありました。それが飛鳥時代に入ると、聖德太子によつて佛教隆昌の根基が固められ、遂に推